

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	土方鉄『妣の闇』論：「書くこと」による自己生成過程
Author(s)	後藤田, 和
Citation	論叢 国語教育学, 16 : 11 - 24
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50701">10.15027/50701</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050701">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050701</a>
Right	
Relation	



後藤田 和

## 一、はじめに

アジア・太平洋戦争後の部落解放運動において、一貫して文化活動の重要さを主張した土方鉄は、これまで、『差別への凝視』<sup>1</sup>、『差別と表現』<sup>2</sup>といった評論家としての言論や狭山裁判に関する演劇、映画の脚本家としての活動、部落解放同盟の機関紙『解放新聞』の元編集長としての側面において多く議論されてきた。しかし、これまで土方の作家としての表現活動については着目されることはほとんどなかった。<sup>3</sup>二〇〇五年二月に肺炎により逝去した折に、『部落解放』において追悼特集が生まれ、彼の代表作である小説『地下茎』と晩年の著作『小説 石田波郷』および俳句創作が取り上げられている。彼の初期創作と一九五〇年代の反戦平和運動をめぐる議論については拙稿<sup>4</sup>においてすでに論じたことがあるが、彼が運動の中で、とりわけ「書くこと」、つまり創作をし続けることにこだわったのか、という問いについては課題を残すところであった。

そこで、本稿では、土方の実体験に基づいて書かれた詩「病床断片 I・II」および小説「妣の闇」を分析対象とし、彼にとつて「書くこと」とはどのような営みであったのかを明らかにしたい。土方は夜間中学に入学した一九四二年に結核を患い、肋膜外合成樹脂充填術とい

う手術を受け、肋骨を九本切除している。さらに一九七一年には右甲状腺腫瘍の摘出手術を受け、一九八一年には甲状腺全摘、声帯の神経一部摘出、右リンパ腺摘出、気管切開という大手術を受けている。このように、土方の表現活動において、部落という問題が常にある一方、病という問題も彼にとつては重要な要素であった。一九八一年の療養体験を踏まえて、『革』一九八二年第四号に詩「病床断片 I・II」が、『新日本文学』一九八七年二・三月合併号に小説「秋の雷鳴」が、『兄弟』一九九〇年第三号に小説「妣の闇」が掲載された。また、「秋の雷鳴」と「妣の闇」は、一九九〇年三月に解放出版社から刊行された単行本『妣の闇―土方鉄小説集』で「妣の闇」としてまとめられた。のちに詳しく述べるが、詩に関しては、土方とほぼ同一の詠歌主体による語りがなされるのに対し、小説「妣の闇」では、「意識の流れ」の文体が用いられることよって、いわゆる私小説的な書き方がされておらず、土方とは別の語り手「私」よって療養体験が語られていく。また、そこには、「私」だけではなく、手術によって生死の境をさまざまに語り手が「おれ」や「わたし」といった一人称で挿入されることにより、複雑な語りの様相が立ち現れている。そういった自己のゆらぎを見せる本作品を分析の対象とすることによって、生と死という大き

な問題に対して、「書くこと」とはいかなる営みであるのか、という観点  
点を明るみにする糸口となり得る。

さらに、この詩と小説を分析の対象とする理由として、両作品の土  
台となる直筆の日記が存在することも挙げておく。つまり、土方は一  
九八一年の療養体験を日記に記し、一九八二年に詩として詠み、一九  
八七年、一九九〇年に小説として書き上げたことになる。このような、  
一つの出来事を繰り返し書き直す姿を追っていくことによって、自己  
の体験を再解釈し、自己を再構成していく諸相を読み取ることができ  
るとともに、土方にとつての「書くこと」とはどのような営みであっ  
たのかを分析していく。

## 二、「病床断片Ⅰ・Ⅱ」と日記—母のモチーフと病という他者

まず、療養体験を初めて創作として発表した詩「病床断片Ⅰ・Ⅱ」  
と日記の関係性について見ていこう。(詩の行番号は論者によるもの。)

### 病床断片Ⅰ

- 1 生と死のはざまの刻でした
- 2 個室の闇の底で
- 3 さえきった目を むりに閉じました
- 4 ふいに部屋のうちに
- 5 人の気配がしました
- 6 あわてて目をあけると
- 7 だれもないのです
- 8 なんだ——と思い
- 9 目を閉じると

- 10 またもや 人の気配がするのです
- 11 それは 実体のないなにかのようでした
- 12 霊というべきでしょうか
- 13 私のベッドにすがりついて
- 14 ものいいかげでした
- 15 この病室で
- 16 死にたくなかったのに
- 17 無念の刻をむかえた人の霊なんでしょうか
- 18 私を誘っていこうというのでしょうか
- 19 「私はまだあなたがたの仲間になるわけにはい  
かないですよ」
- 20
- 21 私は心のなかでいいました。
- 22 「神仏を信じてませんけど、念仏をとなえてあ  
げましょう」
- 23
- 24 なまんだぶ なまんだぶ
- 25 なまんだぶ なまんだぶ
- 26 「まさみ」
- 27 「まさみ」
- 28 くりかえし私の名をよんだのは
- 29 なつかしい声でした
- 30 亡くなった母の
- 31 なつかしい声でした
- 32 そして 私は死と生のはざまから
- 33 ぬけだせたのです
- 34 ぐっすりとねむって。

ここで表現されているのは、「生と死のはざま」で「実体のないなにか」が「ものいいたげ」に「ベッドにすがりついて」おり、死の世界へいざなおうとする「人の霊」ともいえる他者の存在が示されている。死に抗おうとする詠歌主体の意志が『私はまだあなたがたの仲間になるわけにはいかないですよ』という語りから読み取れ、死者として立ち現れているのは『まさみ』と詠歌主体をよぶ「亡くなった母」である。この当時のことが日記では、次のように記されている。

12/7(月)はれ

術後二週間の危機のとき、幻聴、幻覚があった。そのことを書きとめておく。灯りをみて目をとじると、いろんな色になり、しかも流れる。目をあけたり、閉じたりすると、それがめまぐるしくなる。色、灯の残像は、下に流れたり、ななめにながれたりする。そんなことより、数人の人の気配がする。その人たちは、手術の失敗による一霊のように私には見える。思わず「なむあみだぶつ」と念ずる。すると、それいご、その人たちの気配はなくなった。昏睡のとき、医師たちがいろいろやっているのを、私は変なことをやる、などと考えていた。なにか試みられてる感じでした。ぼやとしてる中で、何人かの顔をみたように思う。父や、その他の。

この日記の記述は概ね詩の内容と重なるが、最後に土方自身がみたのは「父」であった点が大きな相違となっている。ここから読み取れるのは、日記を書いた当時のことを再解釈したとき、「亡くなった母」が再構成されたことである。この亡き母のモチーフはそののちに書かれる小説のタイトルにもなるほど、大きな転換点であることが分かる。また、詠歌主体は「まさみ」と「くりかえし私の名をよんだ」とある

ので、土方本人の事であると考えられる。(土方の本名は正美)  
次に「病床断片Ⅱ」を見てみよう。

#### 病床断片Ⅱ

- 1 腫瘍を切りとったあとの
- 2 気管孔からは
- 3 くらいくらい闇がのぞけ
- 4 眼をこらしていると
- 5 だれかが
- 6 うしろ向きに うずくまっていた。
- 7 彼は肺臓のなかで
- 8 ぐじぐじと なにかしていた
- 9 「そうか」
- 10 「やっぱり」
- 11 などと思ひ 私はおもわず顔をそむけようとし
- 12 たが
- 13 逆に 眼が釘づけになった
- 14 彼は私であって
- 15 しかたなしに みつめてると
- 16 私は黒いものを こねまわしていた
- 17 それは、ひしゃげた肺臓で
- 18 空洞が透けてみえ
- 19 その洞のなかで

20 結核菌がチーズ状に固まり

21 昔 すてた女のような過去が

22 微のように こびりついているのだった。

「病床断片Ⅰ」においては、生と死の境で、自己とは異なる他者としての「霊」や「亡くなった母」を表出させたのに対して、この詩においては、「腫瘍を切りとったあとの」自己の中に「ぐじぐじと なにか していた」もう一人の自己に「眼が釘づけに」なる。つまり、他者としての自己を詠んだ詩であると言える。また、もう一人の自己である「彼」は「黒いものを こねまわして」て、その「黒いもの」は「結核菌がチーズ状に固ま」ったものであることがわかる。この腫瘍手術による気管孔から肺臓へと詠む内容が移り変わるのには、土方が一度患った結核の菌が「チーズ状」、つまり発酵して長い間蝕んできたことを示していると言える。

ここで、注目すべき点は、「病床断片Ⅰ」では、療養中に記した日記を再解釈、再構成して、「亡くなった母」というモチーフが形成されたこと、「病床断片Ⅱ」では他者としての自己を病という要因によって見出していく詠歌主体の意識の変遷が読み取ることができるであろう。

### 三、「疵の闇」の四記

まず、小説「疵の闇」について、物語世界の時間と語り手の位置について整理する。物語では、一九八一年一〇月二八日から一月一日までの二二日間、国立K病院に甲状腺腫瘍摘出手術によって入院した「私」の入院生活の様子が、「私」の視点から語られていく。そこでの語りは入院中に語り手が語っているのではなく、入院当時につけた

日記を読み返して、語っている、という設定となっている。こうした時間や語り手の設定がわかる記述を列挙する。

i 私は、十年前の、七一年の夏、右甲状腺腫瘍を、摘出する手術をうけていた。(中略||論者) 私の入院している、病棟は、コ

ンクリートづくりではあるが、それも、すでに古びていて、トイレと洗面所の痛みが、とくにひどい。(入院の間じゅう、そこへ、いつて、用をたすのが、不快だった)。

ii 看護婦が、手術のおり、付き添える者が、いるかどうか、と、

聞きにきた。可能だと妻をあてにして答える。十年前の、手術のおりのカルテが、見つからないという。離婚によって、私の姓が変わったことを、話す。すると、まだ二十代の、彼女が、子どもが、いるのか、と聞き、さらに、子どもと逢ってるか、などと聞く。あまり、逢っていない、と答えつつ、きわめて、立ち入ったことを、聞くんだな、とすこし不快になる。

(いま、考えると、彼女は、私に子どもたちと、逢うことを、暗にすすめてくれて、いたのだ) 7

iii ショッキングな、説明に、日記にかく、この文字もみだれて

いる。ここまでくれば医師の判断に、任さねばならないが、心おだやかならざるものがある。

(いま、こうして、当時の日記を、かきうつしていると、医師は、巧みに、ガンという単語は、避けているが、かなり率直に病状の、重大さを話してくれていることに、気づく。愚かにも、この時点でも、私は自分が、夢にも、ガンなどとは、思っ

ていなかった。) 8

iv そうだ。呼吸は、カニューレで、おこなっているのだ。鼻をつかわないので、匂いもしない。こんな、ありさまは、いつまでつづくのだろうか。(実は、これからが、苦痛の日日だったのだが、もちろん、このときは、わかつてはいない。)

順を追って確認していこう。まず、引用 i から、物語における現在時は一九八一年ということになる。また、「(入院の間じゅう)」「(いま、考えると)」というような括弧内で語る語り手が登場し、地の文で語る語り手の位置とは異なる地点から語る語り手が確認できる。そして、この括弧内に現れる語り手の明確な位置が並に示される。括弧内における語り手によって本作品における語り手「私」の入れ子構造が読み取れるだろう。つまり、一九八一年に右甲状腺摘出手術とそれに伴う療養生活を体験する「私」、その体験を日記につける「私」、そして、その日記を読み返し書きうつす「私」が視点人物となつて語っているのである。このような語り手の構造が「日記体小説」というジャンルにおける特徴であることを安藤宏は、次のように指摘する。

一般に「日記体小説」は、「日記」に擬せられながらも「日記」それ自体とは大きくその性格を異にするものと考えてよいだろう。自分だけを読み手とする「私―私」コミュニケーションである「日記」に対し、活字にされ、他者の目に触れることを前提に書かれた「日記体小説」は、「私―私」コミュニケーションそのものを他者に構成的に開示する試みであると考えられるからである。(中略II論者) 日記を書いた時点の「私」と日記に書かれた「私」と、

さらにそれを後に読み返す読者としての「私」と。通常ならば語り手と主人公と読者とは明らかに異なる位相にあるはずなのだが、「日記体」の場合、この三者は同一人物であるために、否、正確にいえば、「私」という同一人物が日記を読むという行為を通してこの三者を相互に演じ分けてゆくために、「私」は自らの分裂というもう一つのドラマに立ち合わなければならない。10。

次に、日記について確認していく。日記と「妣の闇」の内容はほぼ同一で、「妣の闇」の物語世界と同年同日に入院し、同様の手術を受けていたことがわかる。ただし、先に指摘した「妣の闇」において括弧内で語る語り手はもちろん存在せず、次の点において、決定的な差異が指摘できる。日記では土方の甲状腺摘出手術日である一月二日の記述から一月二四日まではずべて妻の記述であるのに対し、「妣の闇」では、「私」や「おれ」、「わたし」による「意識の流れ」の語りが挿入されることである。前述した期間、土方は手術後の経過観察中に肝臓と腎臓の機能低下によりほぼ意識不明の状態に陥り、一日に人工透析の手術を受け、一命をとりとめる内容が妻によつてのみ記され、一月二五日からまた土方による記述が見られるようになる。これを踏まえると、「妣の闇」における一月二日以降の「(妻のメモ)」と括弧書きされて始まる病状記録以外の語りはそのすべてが直筆日記にはない語りとなつている。この異動の例として一月一六日の日記と「妣の闇」の記述を引用する。

【日記】二/6(月)

今朝病院についてみると、ますます、うつろな表情になつている。いったいどうしたことなのか。ベッドに横たわつたまま、起きあ

がる元気もなさそうだ。

医師の診察はすであつて、そこへも車椅子でつれていつてもらつた様子である。

急に病室があわただしくなつてくる。耳鼻科だけでなくいろんな医師が入りする。内科の医師らしい。どうやら肝臓、腎臓の機能が急激におちているという。原因がはっきりしないので調べているという。血液をとり、またも点滴がはじまる。酸素吸入も：カルシウムの濃度もこくなつていらしい。

いっさいの注入していた薬も回収され、下剤を注入される。肝臓に負担をかけないためだという。

不安でたまらない。本人は昼夜の区別もつかず、目がみえにくいといい、かんたんな計算もちゃんとできない。ぼんやりしている。

夜中に酸素吸入の機械が変えられる。O<sub>2</sub>をとりいれるだけでなく、CO<sub>2</sub>を体外に出すそうさ。

今日は医師も皆おそくまでつめ所にいる。不安でたまらない。

【妣の闇】 十六日 月曜日

(妻のメモ) 今朝、病院についてみると、ますますうつろな表情になつている。起きあがる元気もなさそうさ。

急に病室が、あわただしくなつてくる。耳鼻科医だけでなく、内科の医師もではいりする。肝臓、腎臓の機能が、急激に落ちていくという。酸素吸入と点滴が再開される。検査のために採血。

カルシウムの濃度が、異常に濃くなつていそうさ。一切の薬

は回収され、下剤を注入される。肝臓に負担を、かけないためだという。

ふゆうが つづく

不安でたまらない。本人は、昼夜の区別もつかず、まだ明るいのに暗いといい、医師の問いかけの簡単な計算すらできない。

つづく ふゆう

夜中に酸素吸入の機械が、バードというのに変えられる。O<sub>2</sub>をとりいれ、CO<sub>2</sub>を体外にだすのだそうさ。呼吸が苦しそうで、不安でたまらない。

なにが おきたのか ベッドでねている おれを とりかこむ  
ざわざわしたひとの けはい うすぐらい くらい くらい  
その ひとの むれの だれかが おれをよぶ なつかしい  
こえ こどもを よぶ はのこえ 「まさお」 えっ おれは  
め を あけているのか とじているのか いや あけても  
とじても おれを とりかこむ ひとの けはいが ざわざわ  
する このへやで なくなつた ひとびとか。 「まさお」 し  
んだ おふくろの おれをよぶ こえが みみ に とどく  
ははが よんで いる なつかしい ベッドに すがりついて  
じつと おれを みつめる はは。 そっちへは  
まだいかへん まだ いかれへんのや なまんだぶ なまんだ  
ぶ すがりつく はは は いつまでも そこにいる<sup>1</sup>

このように、日記に対して「妣の闇」では、ほとんど平仮名、字間空きという特徴的な語りとして表現されている。ここでの表現を先の「意識の流れ」という手法であると述べた。この点について、次節で詳しく見ていく。

#### 四、「意識の流れ」とゆらぐ語り手

竹内泰宏は本作品の解説において次のように指摘している。

これは一読して怖い小説である。生死のはざまから、あえぎ、刻むように書かれた文体によって、国立K病院に入院した「私」が甲状腺腫瘍摘出手術を受ける経過が、克明に記録されていく。病状の進行や、生死の境に立たされた人間の見るものや、その抱く幻想（それは幻影のようであって幻影ではない）や追憶がつきつぎと緊迫した時間のうちにえがきだされていく。（中略∥論者）生と死のせめぎあう記録を織りなしていくこの作品の文体は、小説のそれとは異っている。ことばと、ことばの指す対象が（幻想をふくめ）一対一の対応を形づくっている。肉体はものに囲まれ、死と拮抗しているが、そこに生まれるぎりぎりの意識とことば、そして自由を求める生の姿。<sup>12</sup>

また、日野範之も竹内と同様の点を指摘しながら、本作品における文体について「意識の流れを追う文学方法は貫かれている」<sup>13</sup>と指摘している。「意識の流れの小説」とは、「作中人物の意識の中に連続的に生起する意識の種々層を描写する小説」のことで、「言語化される以前の意識のレベルに焦点をあて、文法的理論や統語法を無視した、分節

化されない（時に断片的な）心の反応を描き出そうとする」<sup>14</sup>という特徴を持った小説である。具体的には次の場面における「おさえられない」以降の文である。

一九八一年十月二十八日 水曜日 晴れのちくもり  
午前、国立K病院に入院。

私には、何度めの、入院になるのだろうか。入院というのは、何回くりかえしても、慣れない。いつも、緊張と、あるおそれか、体の奥のほうから兆す。看護婦さんに、案内されながら、長い廊下を、妻と歩く。パジャマのうえに、ガウンを着こんだ男と、すれちがう。どうみても、患者にみえない。その、姿が、なぜか。私の心を和ませる。

エレベーターであるが、担送車が、十分はいれるように、スペースが、とってあって、ばかに広い室内。エレベーターは、三階でとまる。エレベーターをでると、西三病棟であった。三五三号室に、いれられる。

おさえられない ほどの 尿意。 おれは さきほどから、トイレを さがしている。それは みあたらない。暗い。うすぼんやり 眼にうつる ものは なんだろう。どこかへ まよい こんだ のか。よごれた コンクリートか、石か、さだかでない塊り。いや 壁のようなもの が、かすかに みえている。闇から せりあがって……。おれは 尿意 を こらえ、でも トイレは ない <sup>15</sup>

先行論においては、こういった文体への着目がほとんどであり、この点については、土方の書いてきた作品の特徴でもある。

しかし、論者が指摘したいのは、先に引用した本文でもわかるように、一人称の異なる語り手が登場する点である。地の文では「私」と自己を語る語り手が存在する一方で、「意識の流れ」の手法で書かれた部分には「おれ」という一人称を用いる語り手が登場する。さらに、医師に病状と手術の説明を聞いた直後になされる「わたし」の「そこ」を「ぎらり　かがやく　ちのほね　が　とおり　すぎる」という語りの場面では「わたし」という語り手も現れる。このような語り手のゆらぎは何を意味するのだろうか。

この点について、自伝的記憶研究の知見から、人が過去を思い出すたびに新たに過去を組み立て直す時、日記がどのように関わることかを分析した社会心理学者の遠藤由美の論<sup>16</sup>を参考に図式的に整理したい。遠藤によると、次のA・B、二つの側面から「日記をとおした自己語り・自己生成過程」を図①（論文末尾参照）のように示すことができるという。

A 自己の在りようが記憶の構成・再構成を媒介にして日記に記されるという自己語りの側面

B そのような日記（内容）が、読み返しを通じて、のちに自己の記憶の在りように影響する、という自己確認ないし自己生成の側面

このことから遠藤は、日記を綴りながら想起するのは、出来事そのものではなく、また出来事に関わるタイム0時点の自己0そのものでもなく、できごとに関わった自己0について、タイム1時点での自己1が語る物語である、と指摘する。

そして（B）については、書き手本人が日記を所有し、読み返すという行為から生まれ、読み返す時点をタイム2として、日記を読み返すことよって記憶2が精緻になる。そこには自己1や自己1を通して描き出された自己0と現時点での自己2とのずれが対比的に浮かび上がり、その時点における自己2からの再解釈は記憶の再構成を引き起こし、記憶2は記憶2へと変化する。この変化によつて自己のアイデンティティを確認し、強め、自己1と自己2の比較から、これらの方向を探る指針を得る。このような役割を帯びる日記は読み手にとっては他者の「自己語り」にすぎないが、書き手本人にとっては体験し日記に綴り、日記を読み返すといった循環的行為を通じて、異なる自己を発見し、新たな自己を紡ぎ出すかけがえのない場であり、時間であり、行為そのものである、と遠藤は論じている。

以上の遠藤の論に基づいて、論者が土方の療養体験と日記、「病床断片I・II」、「妣の闇」の関係をあてはめて整理、作成したのが図②（論文末尾参照）である。

まず、（A）に関しては遠藤の指摘同様、一九八一年の入院生活と手術に関する内容を自己語りしたものとして記されたのが「日記」である。次に、（B）については、遠藤の論では、「自己2」による日記の読み返しによつて自己確認や自己生成がなされる過程を通して自己2が立ち上がってくるまでが議論されている。これを土方の一連の創作活動に関係づけると、この（B）の過程が少なくとも三回繰り返されることとなる。すなわち、日記を書いた「私1」が日記を読み返すによつて生成される「私2」への過程（B1）、「私2」が日記を

読み返すことによつて生成される「私3」への過程(B2)、そして「私3」が日記と詩を読み返したことによつて生成される「私3」への過程(B3)の三段階の自己確認・自己生成過程である。

その段階を示すように各段階において、創作がなされており、「私2」による創作が「病床断片I・II」(C1)、「私3」による創作が「妣の闇」(C2)として、確認することができる。

前述したように、「妣の闇」には語り手のゆらぎによる複雑な語りの構造があつた。そこで取り上げた語り手の人称、および文体の書き換えについて、先の遠藤の議論を援用することによつて、語り手の位置づけが可能となる。「妣の闇」に登場した語り手について再度整理すると、(1)括弧内の語り手、(2)地の文の語り手、(3)「意識の流れ」文体の語り手であつた。そうすると、本作品を執筆する土方自身を「私3」として、(1)が「私3」、(2)が「私1」、(3)が「私0」の時間軸に位置していると考えられる。

このように語り手の一人称が異なることと、異なった一人称ごとに語り方が異なることから、書き手である土方の意図した書き分けがなされていることがわかる。そこには土方が「日記体小説」でもつて本作品を構成したねらいが表出していると言える。さらに、一見すると誰が語っているのかわからない「意識の流れ」の文体における語り手も、「私1」の綴った日記を読み返すことによつて、再構成され、再解釈された「私0」を「私3」が語り直していると捉えることができるのである。以上の語り手の位置関係を踏まえると、「妣の闇」は、語り手のゆらぎや文体のレベルで、「私」という語り手の自己確認・自己生成過程を見出すことができる作品であり、他者としての自己を幾度も

語り直そうとしたテキストであると言えるのである。

ただし、「意識の流れ」文体を用いて、明確に語り手の書き分けを行っているとは言いが切れない表現があることを確認しておく必要がある。次の二つの場面である。

暗い。やはり、暗い。私の肉体に、加えられた、メス。暗い。そこにいるのはだれ。暗がりにいる。暗がりに光るもの。それが私を切り裂く、暗い肉体。腐敗する肉体。流れる、液体。赤い、暗く赤い、液体。黒い液体。流れながれ、ながれる。ながれる、私の肉体が、私か、流れる。ベッドに、あおむきに、ねている、私の肉体が、腐敗し、流れる。とどまらないよ。とどまらないよ。何処へ、どこへ、溶けて、流れるのか。ながれるのか！<sup>17</sup>

といった語りがなされ、「意識の流れ」文体の語りに「私」という語り手が立ち現れる。さらに、次の引用のように地の文に入り混じるといった語り手のゆらぎも確認できるのである。

妻は、気づかわしそうな、表情でいる。私は、笑顔をつくつてみせるが、愉しいのでもちろんない。むしろ、くるしい。痰が、たまつてくると、カニユールという樹脂でつくられた管の空気穴がつまる。すると、呼吸困難がくるのである。私は、声がでないので、指さしては、手をさかんにふつてみせる。エア・ポンプの、モーターが、かなり摩擦しているらしい音をたてる。妻は真剣な表情で、ゴムの管を、さしいれる。ずうずうという、吸入音がし、わたしは、呼吸が、楽になる。そうだ。呼吸は、カニユールで、おこなっているのだ。<sup>18</sup>

これまで論者が整理してきた枠組みからはずれるような語り手のゆらぎからは、自己を再構成し、再解釈しようとするほど、自己とは異なる自己、すなわち他者化された自己が立ち現れてくる場を讀み取れるのではないだろうか。

## 五、「書へい」への使命感

ここまで、「妣の闇」における語り手や文体の分析から土方にとつての書くことによる自己確認・自己生成過程を讀み解いてきた。ただ、「妣の闇」には、そういった語り手による文体の書き分けだけではなく、新聞記事の挿入といったもう一つの特徴が存する。次の二つの場面である。

〔朝日新聞 1981・11・2 朝刊〕

（中略Ⅱ論者）「北九州市揺るがす土地疑惑 長期市政に試練解放運動にもマイナス（本文）北九州市で、市職員や部落解放同盟（解同）地区協議会の一部幹部らが登場する同和行政がらみの土地転がし疑惑事件が次々に発覚、百万市民に衝撃を与えている。……一連の土地転がしは、市が土地を手に入れる前に、まず、地主から第三者に土地が渡り、それを十日から半年ぐらいて二―七倍で市が買収——という経過をたどっている。市の取得目的は、同和住宅建設用地が大半で、本来の地主と市とのパイプ役である第三者に、市職員、解同地協幹部、さらには全日本同和会最高幹部がからんでいるのが特徴だ。……」眼は、活字のうえを、ながれる。あほなことを。あほなことを。でも、時間がない。もう、数時間で、手術室へ、運びこまれる。体が熱くなる。（中略Ⅱ

論者）土地転がし、土地転がし。暗いくらい、穴。深いふかい、穴。穴あなあなあな……腐食する腐食。金銭が腐らせる、腐れるくされ、おれは、その同類、腐れのくされ……<sup>1)</sup>

〔朝日新聞 1981・11・12 夕刊〕

（中略Ⅱ論者）「根深い癒着の構造 北九州市の同和行政めぐる疑惑」同和行政をめぐる土地ころがし疑惑が噴き出し、部落解放同盟の地方幹部らと市当局の『構造的癒着』が問題になっている北九州市で、今度は解同系企業組合幹部による公共事業の入札介入疑惑が明るみに出た。調査が進むにつれて、疑惑は底なしの様相さえ示している」リードを讀むだけで、もう、活字をみていることができない。深い絶望感。<sup>2)</sup>

ここに挿入されている新聞記事は一九八一年に発覚した北九州土地転がし事件のことで、二つの記事ともに実際の朝日新聞の記事が挿入されている。当該時期は一九六九年から一〇ヶ年の時限立法である同和对策事業特別措置法が、一九七九年からさらに三年の延長を迎え、この法律の期限が切れようとしている最中で、歴史的に見るとこの法律は地域改善対策事業特別措置法と名称を変えて存続するわけであるのだが、法律の行方が焦点化されていた時期であった。そのような時期における解放同盟と行政の癒着が明るみになったこの事件は、「一部幹部の問題とはいえ、解放運動を後退させたことは否めない」<sup>2)</sup>と報じられ、被差別部落の環境改善対策として、巨額の予算が計上されてきた同和对策事業に関わる活動により、同和団体が政治家・役人・暴力団と結託し、公共事業に便乗して巨額の利権を手に入れるいわゆる「同和利権」の始まりにあたる事件であったと言える。このよ

うな部落解放運動における運動体の腐敗に対して「あほなことを」と落胆し、新聞記事の見出しを見ているのも嫌になるほどの「絶望感」を抱く「私」の心情が吐露されている。そこには、「おれは、その同類、腐れのくされ」と後退する運動体に、自分自身も所属していることに對して苦悶する「私」の内面の複雑な気持ち「おれ」という語り手によって語られていく。このことについて、土方自身の日記には次のような記述が残されている。

同盟の再生は一に、この際、徹底したメスを入れるか、否かにかかっている。各幹部の行政との癒着や、行政の幹部甘やかしといったものが利権にかかわる、いやな人間をつくりだした。―と私は考えるが。とあれ、本物の運動をつくらねば。<sup>22</sup>

おれはこの際、本をよみ、小説の構想をねり、(中略)論者「自白」とやはり、この同盟の腐敗の根源をつく作品をかくべしと痛切に考える。<sup>23</sup>

「同盟の再生は一に、この際、徹底したメスを入れるか、否かにかかっている。」「本物の運動をつくらねば。」といった記述からは、部落解放運動に携わる人間としての強い覚悟が見られ、その覚悟からくる使命感にも似たような思いで「この同盟の腐敗の根源をつく作品をかくべしと痛切に考える」と言う。この「腐敗」と並べられている「自白」というのは、狭山事件における石川一雄の「自白」のことであり、土方にとってはそれほどまでに運動の後退は重要な問題意識であった。そして、この問題意識の反映のさせ方に「書くこと」による表現が選択されることは、部落解放運動において文化活動を重要視した土方に

とつての使命感が読み取れるように思う。

また、日記の記述にも「私」と「おれ」のような一人称のゆれが確認できることにも注目すべきであろう。「妣の闇」において、この部分は「おれ」によって語られている。ここまで見てきた、自己確認・自己生成の過程が、部落の問題を語る場面でも見られることとなる。病との関わりにおける自己確認・自己生成だけではなく、部落解放運動との関わりにおける自己確認・自己生成の過程がこの場面から読み取ることができよう。

## 六、おわりに

以上のように、土方に起こった生と死の境をさまようという強烈な体験は、まず公開を前提としない日記に綴られ、そのおよそ半年後に自分自身を詠う詩として公開され、それらを含みこむ形で小説「妣の闇」が執筆された。遠藤の論では、あるできごとが日記という媒体を介して綴り、読み、綴るといった循環的行為に「自己確認・自己生成過程」があらわれ、新たな自己を見つけ出していくとされていたが、土方の場合は、日記を綴り、それを読み、詩を書き、小説を書くという表現行為によって、「自己確認・自己生成」がなされたことがわかる。一九八一年の療養体験は、段階を経て、またジャンルを超えて、読み直され、書き直されることにより、語り手のずれが生じた。この語り手のずれにこそ、自己を再解釈し、再構成する軌跡を読むことができるのである。そこで書かれる内容には、病と自己の関係だけではなく、部落解放運動の「後退」と自己との関係が語られている。部落解放運動における文化活動は重要であるとする土方の主張が、決して運動全体に浸透していたではなく、むしろ軽視されていたことに対する葛藤もこういった点からうかがい知れる。この一連の営みには、「書くこと」

にこだわり続けた土方の表現への姿勢と運動への向き合い方が現れていると言えるだろう。

また、日記の最終頁、一九八一年二月三日に次の記述が残されている。

八一年のおわりに。

インド旅行は、私にとって大きなものをもたらした。そして、甲状腺の悪性腫瘍。↓手術。これもまたひとつの決意をうながした。つまり、ずるずると新聞（機関紙）編集におぼれていき、本来の仕事をおろそかにしてきたことの悔しさ。猛然とのこり時間を感じる。死という意味でなく、老齡—ボケのこない時間のこと。作品を書く体力のつづく、残り時間である。私は、自分の生存を根テイから問う作品をかくこと。それが、私の「のこされた時間」それを決意する。

「妣の闇」はまさにここに綴られた内容が集約された作品である。そして、「のこり時間」は「死」までではなく「老齡—ボケのこない時間」、つまり「書けなくなること」こそが土方にとっての「死」を意味し、逆転させれば「書くこと」こそが土方にとっての「生」であったと解釈できる。

最後に、日記というジャンルをめぐる本論の課題を付言しておく。本論では、土方にとつての「書くこと」とはどのような営みであったかを彼の日記を一つの参考点として分析してきた。日記というジャンルを記録としての史料だけではない観点から議論する必要性を説いた吉田則昭は次のように指摘する。

どのように秘匿された日記でも、日記を読み返す将来の自分自身を思い浮かべる限り、それは紛れもない読者であり、現在の自己とは異なる他者である。より公的な性格の強い初期媒体と同様に、綴られる内容は取捨選択され、虚実が錯綜する。この意味において、読者を想定しない日記はない。（中略—論者）日記とは、最も日常的な初期行為の反復的实践であり、他所の存在との意識的・無意識的なせめぎ合いの中で自己についての書き続けることに他ならない。（中略—論者）虚実が混ざり、読み手の解釈により相貌を新たにし、書き手が想像しなかつた意味が見いだされること。換言すれば、日記を学的関心の「問い」に応える論拠ではなく、真摯に向き合うことでまさしくそこから新鮮な「問い」が生まれる磁場と捉えることに他ならない。一見して事実性が担保されがちな日記資料にこそ、テキストの一義的な理解を抑制し、あるいは抗つてきた文学研究の蓄積と視座を活かすべきではないか。<sup>24</sup>

本論において、土方の日記は、土方にとつての「書くこと」とは何かという問いを見いだすための論拠として参照してきた。しかし、吉田が指摘するように、この療養中に綴られた日記と「真摯に向き合う」ことで「新鮮な『問い』」を見出すことが望まれる。例えば、土方の日記には甲状腺腫瘍、つまりガンの治療における記述が主になされており、これは昨今研究が進められている「闘病記」<sup>25</sup>というジャンルにあてはまる。この「闘病記」研究の課題について、信岡朝子は「主に患者の治療に役立っているという治療的・臨床的な側面のみに関心が向いており、闘病記を読む／書くとはいかなる営為なのか、そもそも闘病記は何のために、いかにして読み解かれるべきなのか、といった文学研究の視点から見て看過しがたい問題についての考察は、どうしても

置き去りにされがち」<sup>2,6</sup>であると指摘する。このような新たな問題へと議論を展開させる余地が、土方の日記には残されている。今後の課題としたい。

## 注

- 1 土方鉄『差別への凝視』（創樹社、一九七四・三）
- 2 土方鉄『差別と表現』（解放出版社、一九七五・八）
- 3 秦重雄「戦後部落問題文芸と研究の到達点」（部落問題研究所編『部落問題解決過程の研究』2巻 教育・思想文化篇）部落問題研究所出版部、二〇一一、三四八頁）では、「新日本文学会会員であった土方鉄の批評・創作活動は、草創期『部落』文芸欄を担う精力的なものであった。貧窮と肺結核と格闘しながら、差別に抗う若いエネルギーを文学表現の形で放出して行ったことに高い評価を与えたい」と指摘されている。
- 4 後藤田和「サークル文化運動と部落民の表現…土方鉄を中心に」（『論叢国語教育学』一四号）
- 5 土方のご遺族に資料調査を依頼した際に、この日記の存在が確認された。B5版の大学ノートの表紙に「1981.10.31~12.31」と記載され、一日一頁ずつ直筆で執筆されている。
- 6 『疵の闇』六〇七頁、一〇月二八日の記述
- 7 『疵の闇』一〇頁、一〇月二九日の記述
- 8 『疵の闇』一五頁、一〇月三十一日の記述
- 9 『疵の闇』二五頁、十一月三日の記述
- 10 安藤宏「日記体小説をめぐって—太宰治『正義と微笑』を視点に—」（『国文学解釈と教材の研究』一九九六、二）また、安藤は太宰治の「正義と微笑」を題材にして、『日記体小説』とは、『日記』が日常的な現実を前に『私—私』コミュニケーションとしての自らの臨界点を浮き彫りにしてゆくその過程を、内部の組み換え作用を通してわれわれに鋭く突きつけてくれる、きわめて刺激的なジャンル」であると述べ、そこには、『他の誰とも違う自分』を内省的に突き詰めようとする近代日記の「文学性」を内側から解体してゆく「特徴があると論じた。
- 11 土方鉄『疵の闇』（解放出版社、一九九〇・四）四七〜四九頁

12 『疵の闇』三四一頁〜三四三頁

13 日野範之「風もなく蘆原さわぎ世界病む—土方鉄作品論」（『新日本文学』二〇〇四、三）

14 遠藤由美「過去記憶と日記、そして自己」（『現代のエスプリ』二〇〇〇・二）また、図①に関しては、遠藤論文では横書きのため、本論では論者が便宜的に縦書きに作成しなおした。

15 川口恭一・岡本靖正編『最新 文学批評用語辞典』（一九九八、七・二一、研究社出版）一七、一八頁

16 『疵の闇』三三四頁

17 『疵の闇』三四頁

18 『疵の闇』二四〜二五頁

19 『疵の闇』一八〜一九頁

20 『疵の闇』四四頁

21 朝日新聞 一九八一、一一・二 朝刊

22 二月一〇日の記述

23 二月一〇日の記述

24 吉田則昭『書くこと』の歴史を問うために—研究視座としての「日記文化」の可能性と学際的・国際的連携—（『日本近代文学』第九六集、二〇一七）

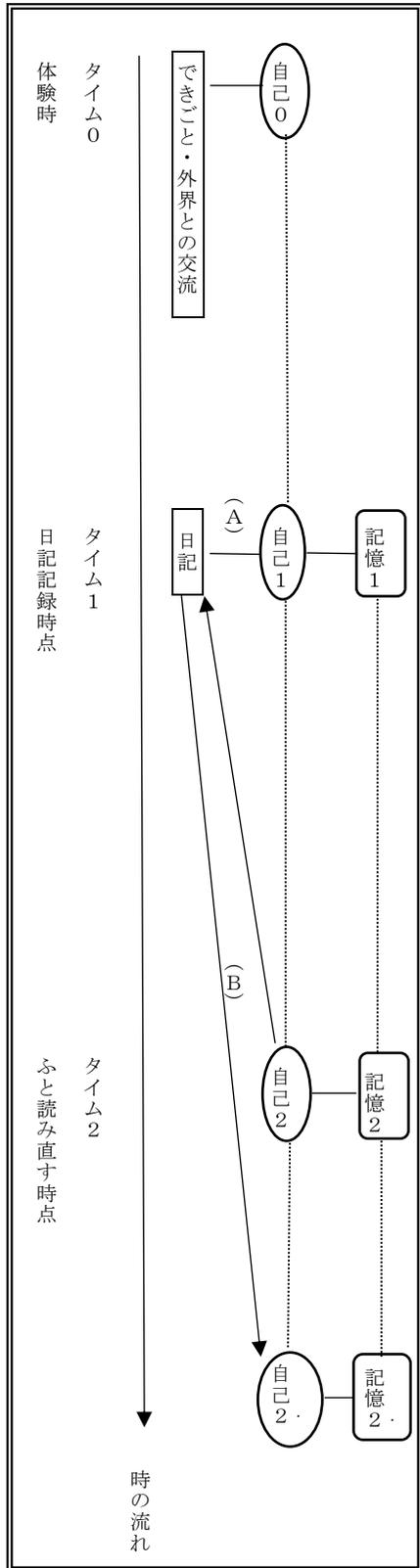
25 門林道子『生きる力の源に…がん闘病記の社会学』（青海社、二〇一一、一〇、一頁）において「闘病記」は次のように定義されている。

『臨床死生学事典』（2000）において「闘病記」を「病氣と闘う（向き合う）プロセスが書かれた手記」と定義した。病氣を患う人自身が、自らの病いについて、そして病いと向き合う自分自身について書いたもの、それが闘病記である。さらに本研究では、患者本人以外、主として家族が書いたものについても、個人の闘病に力点がおかれたものであれば「闘病記」とらえている。

26 信岡朝子「闘病記研究の可能性—当事者性と他者理解の観点から—」（『文学論叢』、東洋大学文学部日本文学文化学科編、二〇一三、二）

（広島大学大学院博士課程後期二年）

図①



図②

